



Data

監督: マイケル・ノア
脚本: アーロン・グジウスキ
原作: アンリ・シャリエール『パピヨン』(河出文庫)
出演: チャーリー・ハナム/ラミ・マレック/イブ・ヒューソン/ローラン・モラー/トミー・フラナガン/ヨリック・パン・バーヘニンゲン

👁️👁️ みどころ

『大脱走』(70年)で見事な脱走劇とバイクアクションを見せたスティーブ・マックイーンは、『パピヨン』(73年)でも名演技を見せたが、その名作が45年ぶりに復活!

しかし、原作を生かしつつ、『トランボ ハリウッドに最も嫌われた男』(15年)で一躍有名になったダルトン・トランボが脚本を書いた旧作を上回るのは至難のワザ。誰もがそう思うが、本作の評価は高い。それには、パピヨン役とドガ役を演じた2人の俳優の演技力が大きく寄与している。そのうえ、旧作とは違う興味深い視点もチラホラと・・・。

旧作では、哀愁漂う美しいテーマ曲が印象的で、大海原にたった一人で浮かぶパピヨンの姿が今でも記憶に残っているが、さて本作は・・・?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■弁護士45年!パピヨンの復活も45年!その重圧は?■□■

スティーブ・マックイーンとダスティン・ホフマンが共演したオリジナル版の名作『パピヨン』が公開されたのは1973年。私が司法修習生の時で、私が観たのは弁護士登録1年目の1974年だ。それから45年、私の弁護士生活も45年になった。今の私は弁護士業と映画評論家業との“二足のわらじ”で気楽なものだが、私と同じく、45年ぶりにあのパピヨンが復活!しかし、なぜ今?チラシには「脱獄映画の金字塔が45年ぶりに蘇る!」「パピヨンは死なずー」と書かれているが、いくら何でも、あの強烈だった『パピヨン』のリメイクはムリがあるのでは?

しかも、資料を確認したところ、オリジナル版の脚本を書いたのは『トランボ ハリウ

ッドに最も嫌われた男』(15年)で一躍有名人になった(『シネマ 38』123頁)、脚本家のダルトン・トランボだから、本作の脚本を書いたアーロン・グジコウスキの重圧はすごかったはずだ。また、パンフレットによると、マイケル・ノア監督は「2003年にデンマーク国立映画学校を卒業し、自身の世代において、最も才能ある監督の一人としての地位を確立している」そうだが、私は全く知らなかったし、過去の有名な作品もないようだから、『パピヨン』のリメイクという重圧は相当だったはずだ。

しかし、キネマ旬報7月上旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、3人の映画評論家は星4つ、4つ、5つと高く評価している。そりゃ、一体なぜ？

■ 1931年の日本は満州事変！その時フランスは？ ■

1904～5年の日露戦争で戦勝国となり、1914～18年の第1次世界大戦では日英同盟の同盟国としてドイツを破り、イギリス等の戦勝国の仲間入りをした日本は、その後、軍備拡張と中国大陸への侵攻を強め、ついに1931年9月18日満州事変を勃発させた。このように1931年の日本は“きな臭い匂い”が漂いはじめていたが、はるか遠く、1931年のフランスは？パリは？

その時代、イギリスと同じように帝国主義的侵略を続け、植民地を拡充させていたフランスは、フランス領ギアナには終身刑の囚人たちを収容し、絶対脱出は不可能と言われていた“悪魔島”を有していた。しかし、本作冒頭ではオリジナル版にはなかった、金庫破りのパピヨン(チャーリー・ハナム)が華麗にその実力を発揮し、恋人のネネット(イヴ・ヒューソン)と共に最高の時間を過ごす風景が描かれている。しかし、ちょっとした手違い(?)でパピヨンは無実の殺人罪にハマれることになり、ネネットと別れ、悪魔島に送られることに。フランス領ギアナがどこにあるのかはスクリーン上に明示されないが、周囲を海に囲まれた悪魔島は脱出不可能な監獄として知られ、囚人たちは過酷な強制労働を強いられていたらしい。大量の囚人が悪魔島に送り込まれるシークエンスを見ると、終身刑の囚人がこんなに多いことにビックリだが、さて、悪魔島での囚人たちの待遇は？囚人たちのトラブルは、まず悪魔島に向かう船の中で。そして、悪魔島での強制労働がはじまると、さらに……。

■ 2人の友情に注目！その絆の強さは？その源泉は？ ■

オリジナル版では何とんでもなくパピヨンを演じたスティーブ・マックイーンの個性が強烈だったが、本作でパピヨンを演じたチャーリー・ハナムも若さと向こう意気の強さでは相当なもの。それに対して、オリジナル版ではダスティン・ホフマンが演じたドガ役を、本作では何と『ボヘミアン・ラプソディ』(18年)『シネマ 43』38頁)でアカデミー賞主演男優賞を受賞したラミ・マレックが演じているから、それに注目！

ドガはメガネをかけた気力も体力も弱そうな小男だが、偽札作りの天才だから、看守を

買収するための偽札づくりならお手のもの・・・？まあ、そんな単純な物語になるはずはないが、悪魔島へ向かう船の中で脱獄する決意を固めているパピヨンとパピヨンへの資金提供を誓ったドガとの間には熱い友情が生まれてくる。したがって本作では、メインとなる脱獄のスリルとサスペンスだけではなく、この2人の友情の絆の強さとその源泉にも注目！

■□■脱獄は不可能！失敗の代償は？■□■

本作の主演はもちろんパピヨンとドガの2人だが、本作では刑務所長ウォーデン・バロット（ヨリック・ヴァン・ヴァーヘニンゲン）の存在感も目立っている。長い船旅を経て悪魔島に上陸した囚人たちを整列させたウォーデンは、「この島の監獄からの脱獄は不可能。もし、それを試みて看守を死亡させた者は直ちに処刑。失敗した者は1度目は2年間の、2度目は5年間の単独房に入れる！」と宣言したから、その圧力は相当なものだ。現にその言葉通り、パピヨンたちより先に脱獄を試みた男はたちまち捕まった上、ギロチンで首を切られてしまったからすごい。

もっとも、ドガの偽札を活用しながら脱獄のためのさまざまな策を練っているパピヨンは、そんな圧力を全く感じていないようだ。しかし、買収した金で用意してもらったボートに乗り込もうとすると、その紹介者はウォーデン所長からも二重に買収されていたから、アレ・・・。たちまちパピヨンとドガは「御用！」となり、パピヨンには2年間の単独房での懲罰が課せられることに。そこでは、情報から隔離されるのはもちろん、ロクな食事も与えられず、話し相手もないから、どんな囚人でも気力、体力が衰え、廃人同様になってしまうのが常だった。しかし、ウラで手を回したドガの努力によって、毎日の食事にココナッツの実が密かに追加されると、たちまちパピヨンの気力は回復。『ダブル・ジョパディー』（99年）では、監獄に収容されていたヒロインがダブル・ジョパディー＝二重処罰の禁止の法理を聞いて、たちまち気力を取り戻し、以降は仮釈放を目指して模範囚となり、体力の維持に努力を続ける姿が印象的だったが、本作に見るパピヨンも再度の脱獄のため、狭い独房の中で体力の維持に努めることに。もっとも、ある日パピヨンの気力体力が衰えないことに疑問を持ったウォーデン所長にそれがバレてしまうと・・・？

■□■13年間で9回も！ラストではそんな原作者も登場！■□■

ハリウッド活劇の『大脱走』（70年）では、地下トンネルを使った脱走を成功させたものの、ちょっとした手違いによって発見されてしまったため、最終的に脱走できた者はごく少数にとどまった。そのため、ラストではスティーブ・マックイーンが演じた野球好きの兵士は再度収容所に逆戻りさせられる結果になっていた。また、そこでは脱走計画の実行は1回こっきりだったが、アンリ・シャリエールが書いた原作ではパピヨンの脱獄の試みは13年間で計9回にも及んだというからすごい。もっとも、本作でやっとパピヨンが

成功させた脱獄は3回目だから、1度目と2度目の失敗を踏まえたパピヨンの脱獄成功の姿にしっかり注目したい。そして、その脱獄計画は、毎日観察している海の潮の流れを読み取った結果に基づくものだから立派なもの。スティーブ・マックイーンが主演した前作では、美しいテーマ曲が流れる中、パピヨンの脱獄の成功に拍手喝采したが、それは本作でも同じだ。

ちなみに、本作が前作と大きく異なるのは、ラストのスクリーン上に原作者自身が登場してくること。フランスでは、そんな脱獄の体験談を出版する自由があることにビックリだが、さて、殺人罪で終身刑を言い渡されたパピヨンの法律上の処理はどうなったのだろうか？脱獄劇の醍醐味とは別に、弁護士の私はその方面にも興味があるのだが・・・？

2019（令和元）年7月18日記